

# 東南アジアのアイデンティティとその哲学

矢野 暢

## 1

東南アジアを語るといふのは、実は私にとって一番苦手なことです。自分の一番専門としていることについて語るといふのは、いわばまだ未完成の学問体系について、途中で中間報告をするに等しいという苦もある。また、もう一つ、別の理由もあります。

私は「東南アジア」という言葉を一生懸命にいろんな文献で探した時期がございまして、地球の上で一番最初に使われたのは、いつかなと調べましたら、何と一八四

〇年でございます。アメリカのボストン生まれのハーワード・マルコムという牧師さんが、今の東南アジア地域を旅行しまして、その旅での見聞を描きました本の題が『東南アジアへの旅』、そこでサウス・イーストという言葉が初めて使われております。その後、アメリカ人あるいはイギリス人がこの言葉をずっと使ってまいりまして、大変皮肉なことに、一九五〇年代まで東南アジア自体に「東南アジア」という言葉は存在しなかったのです。

日本で「東南アジア」という言葉が使われたのは、私の調べたところでは昭和十年、昭和十一年頃、ドイツ語

の翻訳として使われておりますが、私達がこの言葉に広く親しみ出したのは、やはり昭和二十五年前後です。国会用語として使われておりまして、これもいわばアメリカ英語の翻訳という形で使われ始めたわけです。

ということとは、どういうことかというと、ズバリ申し上げまして東南アジアの成立を証明することはむづかしいということ。私の東南アジア学の出発点は東南アジアは存在しないという命題の確認から始まります。つまり東南アジアというものは、外の人がいれば区切って便宜的に名前をつけただけなのです。あらゆる組織、あらゆる団体、あるいは地域もそうですが、本当にそういうものが存在するためには例えば東南アジア的なものとか、東南アジアの本質とか、東南アジアらしさというものが定義されないといけないわけです。ところが不幸なことに、まだ私どもは東南アジアの本質とか、あるいは東南アジアとは何かということは学問的には探しかけておりません。

東南アジアを共通に結ぶものというのではないわけではなく、強いてあげますと、これは皆様聞かれたら

びつくりされると思いますけれども、東南アジア地域のある種の歴史的体験です。どういう体験かというと、ふつう、人はコロニアリズム、つまり植民地支配をあげますが、それではないのです。植民地支配の場合はタイが植民地にはなりません。タイまでまきこんだ運命、みんなを一律まきこんだ運命というのはただ一つしかない。古代のヒンズーですかと、よく聞かれますがヒンズーはフィリピンには及んでおりません。ずっとつめていきますと意外なことに一つしかないのです。

それは、日本軍の占領です。昭和十七年から二十年までの日本軍の占領ないし、当時の歴史的体験だけが唯一共通のきずなです。だからこそ東南アジアに反日論がいつまでたつても出てくるわけです。それほど東南アジアというのは共通の歴史的体験を持っていない世界でして、バラバラに分断されたままです。

以上、東南アジアというものが存在しない、という命題のニュアンスというか、その意味を多少お話し申し上げましたが、本当は東南アジアという言葉を使いたくないという人もいます。日本から見ますと東南に存在しま

せん。西南に存在するんです。そういう言葉をいい加減な形で使うというのは私の主義にもあわないんですが、便利ですから使っているだけのことです。

## 2

私が東南アジア研究を始めたのは、およそ三十年前ですが、その当時、東南アジアというと猫も杓子も少数民族を追いかけた時代です。メオ族とかカレン族とかですね。つまりタイというとチェンマイのまですつと北の山の方に行くという感じでした。そこらの山岳少数民族、これを研究することが東南アジア研究の主流であった時代が長く続いたわけです。

皆様も写真やテレビで御覧になったことがあると思いますが、いろんな民族衣装を着たり、頭に頭巾をかぶったり、極端な場合には首に輪をつけて首を長く伸ばしたり、とにかくいろんな少数民族が東南アジアにはいますが、あれを一生懸命に追いかける、そしてたとえば言語学的に珍しい言葉を探すというのが、東南アジア研究の主流であった時代が長く続きました。

どう違うのか、私どもは全く革命的なアプローチを提案してきているわけです。それはなるべく東西の軸で東南アジアを見ようという考え方です。つまりそういう山岳少数民族はむしろマイナーな存在であり、東南アジアの主役では必ずしもない。そして彼らが雲南に発祥して、山に定着し、さらに山を越えて今のタイ族、ビルマ族を作ったという保証はないというのが私どもの見解です。

つまり東西の軸ということになりますと、どういうことになるかというと、西から東への運動あるいは歴史力学というものを重視しないと今の東南アジアは解けないという考え方です。今、私個人は東南アジアのとらえ方として、外文明と内世界の交錯という視点を提示しております。外文明、つまり外に成立し、外にある文明、これが中に入ってきて中に世界を作っていく、あるいはそもそも中に世界があるかも問題ですが、それと交錯するという外文明と内世界の交錯、これが東南アジアの形成要因であるという論点を、ここしばらく私どもは出しておるわけです。

外文明はほとんど西にあります。例えばインドに発生

それはなぜかというと、照葉樹林文化圏、これがビルマの山地、タイの山地、ラオスの山地からずっと日本の方にのびてきておりまして、日本も照葉樹林文化をもっている。この照葉樹林文化、これを追っかけていきますと、どうしてもそういう山に行くのです。そして日本とのつながりも説明できる。そういうことで学者はみんな照葉樹林文化圏を追いかけていて、どうしてもそこに住む少数民族しか目に入らなかった。

東南アジアをちよつとかじられた方は分かると思いますが、タイ族であれ、ビルマ族であれ、みんなそういう族は中国の雲南に発祥し、山を越えて東南アジアの大陸部に流れてきて定着したという学説があります。これが学界を風靡したものです。今でも私どもみたいな少数の例外を除いてはみんなそういう古典的な学説を信じていらつしゃいます。いわば東南アジア像を南北の軸でみるという見方です。南北の軸、つまり北と南の軸で東南アジアをみる見方というのが従来の学界の主流でございました。

私どもの東南アジア学はそういう従来の学界の主流と

したヒンズー文明、そのさらに西に発生したアラブ世界のイスラム文明、さらにずっと西にありますヨーロッパ文明、そういうものが全部重なっているのが東南アジアでありまして、その文明の伝達、あるいは流れのルートというものに乗っているんなものが入ってきた。

せいぜい北にある文明というのは中国文明です。中国文明も従来の東南アジアの理論は、さっき言いましたように、雲南地方に少数民族が発生して、それが山の裾野に定着し、さらにそれが山を越えて大陸部に定着したという見方をとっておりますが、私どもはそれを否定いたします。中国文明は海で到達した、船でやってきたという見方です。山を越える流れは否定はできませんが、それはまだ山にとどまっているというのが私どもの見方です。それが越えてきて、今の雄大なタイ国家とかビルマ国家を作ったということはあり得ない、というのが私どもの見方です。

つまり東西の軸でないとなぜいけないか、ということを補強するもう一つの視点といたしまして、東南アジアはどのような自然環境、あるいは自然生態環境に区分す

るかという問題をかましておかないといけません。つまり東南アジアは山岳地帯だけではないということです。少なくとも基本的に四つに分けておく必要がある。

四つというのは、まず、そういう山岳少数民族が住んでいるような山間部が一つあります。これには照葉樹林文化圏も含まれます。それから二番目が平原部といって、タイの東北地方とか上ビルマの西部とか、かなり乾いていて木があんまり生えていない土地柄です。地質もあまりよくない。人間もあまりたくさん住んでいないから人口密度もそう高くないというような平原部があります。それからもう一つはデルタ、河口部です。メナム川デルタ、あるいはメコン川デルタ、イラワジ川デルタというように川の河口、これは本当に水びたしです。もう一つ、四番目に島嶼部（とうしよ）というのをあげておきたいと思います。むろん島嶼部もいくつかに細分化できますが、今日は非常に単純化する意味で島嶼部を一括して考えておきたいと思います。

この自然生態環境をどうとらえるかということが、東南アジアの歴史を解くうえで決定的に大事です。先ほど

人間が本来住めないところのデルタを開拓したのが植民地支配でありまして、その結果、人間が住めるようになった。つまりデルタが棲息可能になったのは、ヨーロッパの技術文明との接触のおかげです。私は植民地支配が良いか悪いかの議論をしているのではなくて、歴史的な事実として、ヨーロッパの干拓技術とか、開発技術とかいう、そういう近代技術と接触をしなければ、あのデルタには人間は住めなかったということを申し上げているだけです。ということは、今の東南アジアは東南アジアの歴史の上では例外であり、奇蹟であり、そして初めて迎えた時代だということです。これもせいぜい、ここ百五十年続いているだけでありまして、長い長い東南アジアの歴史においては本当に例外的です。

その一事をもつても分かりますように、文明の伝播というのは面白いことに地形を選ぶのです。ヨーロッパ文明は機械文明でありましたから、どのような自然環境にも入っていくことができました。しかし、これは貿易を軸とする植民地支配をもちこんだわけですから、港が作れるところでないといけませんでした。したがって、

言った南北の軸というのは、この東南アジアのあらゆる自然生態区分の全体をカバーしきれない見方だということです。今、東南アジアはどの時代に入っているかというところ、デルタの全盛期です。河口部全盛期です。バンコク、かつてのサイゴン、今のホーチミン、ビルマのラングーン、こういう今をときめく大都会というのは、みんな本来人間が住めなかったところに出来た大都会です。

いつから人間がそういうところに住むようになったかというところ、せいぜい十八世紀の末でしょう。今みたいな形で多少快適に住めるようになったのは十九世紀の中期以降でありまして、それまで人間はデルタには近寄らなかったのです。近寄れるはずがないのです。まず交通の手段は船しかない。歩けるところはない。それからひどいところでは乾季と雨季とで七メートルも八メートルも水位差がある。カンボジア語で言うプノンペン（プノム）というのは、乾季と雨季の両方に人間が住めるところという意味、水につからないところという意味です。そして病気が多い。マラリアとか様々な病気がありまして、瘴癘（しやうれん）です。人間が住めるはずがない。

河口部に着目したのは当然でした。本来、人間が住めない河口部を機械の力で人間が住める環境に変えて、それを消費市場にし、資源市場にして、つまり新しい世界を作り上げたわけです。

では、昔のヒンズー文明はどうやってきたか。これは面白いことにインドと同じ風土を探しながら飛んでいる。中部インドの自然生態環境と似た所を探しながらヒンズー文明は飛ぶわけです。ヒンズー文明は面白いことに、内陸部の平原部を好みます。デルタは忌避しています。山岳部も忌避しています。多少、乾燥した、そしてあまり木が生えていない、生産性はあまり高くない、しかしながら川がある、川がないところにはため池を作っていくとか、多少そういう水利を求める。そういう形でヒンズーというのは東南アジアに入ってきているわけです。

ヒンズーが紀元前後ぐらいに東南アジアに入ってきました。その時にヒンズー伝達ルートというのはできるわけですが、そのルートの一端をその後、小乗仏教、つまり南方上座部仏教がもう一回たどります。同じような形で

同じルートをたどって入ってまいります。小乗仏教はご存知のようにスリランカから発祥しますが、面白いことに海沿いに行くのではなくて、イラワジ川の川沿いにずっと上にあがっていった、パガンというところで王国を作る。これはかなり内陸部です。

イスラムというのはどのような環境を求めたか。これは海域です。海域島嶼部が好きでして、イスラムでも中国の方にいった回教・フイフイ教を作りましたイスラムは別の風土を求めますが、東南アジアにきたイスラムというのは、面白いことに海沿いのルートをたどります。インドの西北の海岸にグジャラートというところがありますが、そこが大体東南アジアのイスラム伝達の拠点です。そのグジャラートからまた海沿いにどんどん入っていきますと、どうしても島嶼部にイスラムが伝播いたします。したがってマレー半島の南半分、それから今のインドネシアの全域、フィリピンではミンダナオ島、そういうところにイスラムは定着したわけです。不思議なことに、これは内陸を避けています。

バンコクあたりに行きますと、今は回教徒はかなりい

ますが、この回教徒は一八二〇年代に南タイで戦争して勝った時に、タイの王権が捕虜を連れてきてバンコク周辺に住まわしただけでして、これは自然に流入したものではない。

今お話したように、自然生環境と文明の伝播というのがリンクしているということになりますと、簡単な証明作業が必要になってくる。東南アジアの中にはそういうヒンズーとかイスラムとか、あるいはヨーロッパ文明とか中国文明とかにむいた風土があるか、あるいはそういう好みにあった土地があるかという、全部あるということが証明できるわけです。

くりかえしますが、ヨーロッパ文明はデルタを指向した。イスラムは海を指向した。ヒンドゥイズムは内陸部の乾燥した平原部を指向した。では、中国文明はどうかというと、中国文明は港です。やはり海岸を指向しています。したがって東南アジアが雲南に発祥して、山を越えてきた民族で歴史が作られたというのは、私どもから言いますと、非常にマイナーな局面だということになってしまいうわけです。

以上お話したことから分かっていただけです。東南アジア研究、東南アジア学というのは最近急速に見方が変わってきています。西から東への文明移動の軸に中国の海域文化をからませて考えていい、というのはほぼ間違いないと思います。

その意味で結局、外世界、あるいは外文明というものを私達は知らなくてはいけないわけです。東南アジアにものすごく影響を与えたものとしての外文明、これは今、言いましたようなヒンズーとかイスラムとかヨーロッパとか中国とか、こういう文明です。これがなければ今の東南アジアはできなかった。

しかし、他方、それだけではないのであって、内世界というものも緻密に厳密に議論しておかなければいけない。先ほど、東南アジアが立ちましたハイブリッドな世界であると申し上げました。いろんな部族、人種、民族がいると言いましたが、これは東南アジア論の常識です。しかしそれを統一的な東南アジア世界にもってくるためには、どんな、いくつか束ねの作業をやりまして、なるべく数の少ない単位に東南アジアを絞り上げる必要

があるわけですね。ここにアチエ族がいる、ここにバタ族がいる、ここにミナンカバウ族がいる……これではいつまでたっても統一的な東南アジア像にならないわけです。それをどうやって束ねていくかという作業、これが内世界の研究になっていきます。これはかなりむづかしい作業です。

### 3

多くの学者が、特に若い人が探検いたしました、あるところに行ったらこんな珍しい部族がいましたとか、こういう少数民族を発見してきましたとかいう。これはこれで大変な貢献なんです、それは学問の半分ではいいのです。そういう珍種や新種を発見するというのは学問の半分ではない。特に、東南アジア研究の場合には逆の力学、つまりそういうものをさらにくり上げていく、統一していくという逆の手法を働かさないとけません。そうでないと、いつまでたっても東南アジアというものはないと言いつつ続けるを得ません。私達はそこでいろんな試行錯誤をやっています。

今、東南アジアにはいくつかの主権独立国家がありますが、この国家で見ていくやり方はどうか。ビルマ連邦とかタイ王国とかいろいろありますが、この国家で見ていくやり方はどうかというと、これは具合が悪い。国境線がヨーロッパによって勝手にひかれていくわけです。そして国境線が文化の分布、あるいは人種民族の分布に対応していない。今のインドネシアの国境はかつて蘭領東インド、つまりオランダがもっていた植民地と同じ枠です。いろんな理由で、今ある東南アジアの国家というのは、東南アジアの本来像を反映していないというのが私どもの共通確認です。

今、この内世界の研究はいろんな形で進んでいます、今の段階でお話してできることはまだ限られています、東南アジアを今度はいくつかの世界に区切ってみようと、という作業、これを三つに分ける考え方とか、まあ、三つまで絞れると大変なことなのですが、いろいろある。たとえば、一つはマレー世界という概念が、今、学界的に検討されています。マレー世界というのは今のマレーシアのことではないのです。あの島嶼部の人種、民族が共

有しているような文化をもっている世界であります。そのマレー世界というもので見ますと、今のマレー半島だけではなくて、今のインドネシアもマレー世界ですし、そしてずっと西はマダガスカルまでマレー世界であるといえる。フィリピンから台湾までマレー世界であるということが実証できるといわれる。

そうしますと、今度は別の学者が、それは「マレー世界帝国主義」である、けしからん、広すぎるといって批判するかもしれない。インドネシアのジャワというのは独特の風格があるから、ジャワ世界というのを別に作っただろうかという。そこでジャワ世界という概念が新しく出てくる。

では、大陸はどうなのだとする。大陸部はヒンズーがかつて覆い、そしてその後主として上座部仏教が入ってきた世界、これはまた別だという。これも大陸部世界として別に考えたかどうか。つまり、マレー世界、ジャワ世界、大陸部と、この三つでどうかということになってくるわけです。

まだ全然決着がついてないんですが、今、作業仮説と

しては三つの世界を認識のモチーフとして想定して研究が進んでいます。マレー世界論、ジャワ世界論、そしてもう一つ大陸部世界論です。これは中から見た違いで区切ったやり方です。こういう手法もとらないといけない。

まあ、その他、宗教で区切るやり方とか、いろんなやり方がありますが、その内世界というものをどう見るかということとは、学界的には一見研究が深まっているようで、まだ非常に遅れていると思います。なぜ遅れているか理由は簡単です。先程言いましたように「東南アジアにいくつかの国がありますか」から始まるからであります。タイがあり、ビルマがあります。ラオス、カンボジアがある、このようなアプローチをとるかぎりには、いつまでたっても東南アジアというのは見えてこないわけです。

東南アジアを見ようと思ったら、まずそういう主権国家の枠を全部とっぱらって、素直にありのままに東南アジアの世界を見なければいけない。私どもは若い人に、景観学的手法というのを教えるのです。景観学というのは、例えば一枚の白黒写真があったとしましょう。写真をじっと見る。田んぼが写っている。田んぼで百姓が働

いています。で、この一枚の写真から、あなたはいくつの情報を引き出せるか。田んぼというけれども、水田であつても、どのような造りの水田か、そして何が植わっているか。これは稲ですね。何種だ。インディカである。どうしてインディカと分かるか。さあ場所はどこだ。これはマレー半島なのかタイなのかインドネシアなのか。そう言えば背景に家が見える。家の建築様式で、ああ、これはマレー半島だと分かる。マレー半島のどこだ。稲刈りをしている情景に注目する。稲刈りは男でやっているか女でやっているか、あるいは男女混合でやっているか。稲刈りの手法が鎌なのか、それとも手でもって穂先だけつむ器具なのか。そのように、一枚の写真の中にいろんな情報が入っていますから、それを読みこんでいくことによって、多くの知見を得る。まあ例えていえば、そういう手法が景観学的手法です。

いまは写真の例をとりましたが、何でもいいのです。ジープで東南アジアをかけまわってもいいし、あるいは船で川をくだってもいいし、とにかく目の前に見えてくる情景というものをじっと見て、その中からアカデミッ

クな情報をどれだけ引き出すかという手法、これが景観学的手法と申すやり方です。

じつと見つめると、そこから、慣れてきますとすごい情報が見えてきます。見えてくるとしめたものでありまして、広い東南アジアの中の違いのニュアンスが分かってくる。そうすると大体ここから、ここまではこういう特徴がある、ここからここまではこういう特徴がある、それと同時に何の基準でその違いを区切っていくかということも、自ずとその景観学的手法でトレーニングを受けていると分かるようになります。

私どもの同僚のある助教は、ブルネイやスマトラのジャングルを研究している。何カ月間も要するに熱帯降雨林の中をさまようのです。何にも見えないうらい。木だけです。磁石だけを頼りにその樹林の中を歩いていくわけです。そしてその中で寝るわけです。日中は、地べたを掘ったり、木の葉っぱを集めたりして、その中の変化を見ていくわけですね。そういう手法もあります。そういうフィールド調査を重ねながら東南アジアを中で区切っていくという手法もとらないといけない。

るところでも、北の方と南の方とはまた全然違う。いろんな意味で違うのです。

世の中には東南アジアの専門家が増えられて、大変慶賀にたえないのですが、基本的にはみな国家単位の研究をなさっておられる。タイ国の本年度の経済成長率は何%とか言われる。それはそれで一つの大事なあり方です。というのは主権国家の枠に従って、割り切った研究しよう、その中にいろんな人種がいようと無視しよう、東南アジアを作っている単位を、もう主権国家としてしまおうという非常に単純な割り切り方は、それなりに現代的妥当性があるのです。しかし、私どもの方法論はそういう現代との妥協に流されない方法論です。

そういうことで以上長々とお話をしましたが、東南アジアをどうとらえるかという研究方法みたいなものを少しご紹介したわけで、今、大事な視点は、外文明と内世界との交錯を西から東の動きを主軸として、どうとらえるかということ、それと自然生態環境、生態区分をどうかましていくかということ、内世界の論理化をどうするかということ、こういうポイントになってくるわけであ

無論、それはさっき言ったように地べただけでは駄目でありまして、「上物<sup>うぶもの</sup>」というか、人種、民族、言語、文化、様々な建築様式とか通過儀礼の様式とかいろんなのを見て、そして後はその上にできております目に見えない組織原理や政治文化などというものを探りながら区切っていく作業、これが手間ひまかかるものですから、非常に遅れている。

要するに、東南アジアの中をいくつにどう区切るかというの、まだ今日現在できていないということです。たしかに東南アジア研究というのは進んではいるのですが、非常に大事な遅れた領域をのこしている。東南アジアの中をどう見るか、どう区切るかということ、それが分かっているのです。

一番困るのが、たとえば「ビルマの近代化はどうですか」と聞かれることです。ビルマというのは一体何だろうということになるわけです。ビルマ族が住んでいる地域をビルマというのなら話は楽ですが、それだけではすまないんです。ビルマ連邦だったら分かる。これは国境で区切られていますから。しかし、ビルマ族が住んでい

ります。

4

今から少し各論に入ってみたいと思いますが、今日はアイデンティティについて話せということです、それにそって考えていきましょう。ただアイデンティティというのが何で決まるかは、非常にむずかしいのです。何をもってアイデンティティと見るかというのは、とにかくむずかしいのでありまして、普通アイデンティティは複合的なものであるという見方、これが通説だろうと思います。

例えばここに私が座っています。あなたは誰ですか、私は京都大学教授の矢野暢ですと、何気なく答えたと思います。その中にすでに複数のアイデンティティの表現があるわけです。暢というのは、私のことです。矢野というのは矢野一族ですから、これは族のアイデンティティになっている。京都大学というのは私の属している職業集団のアイデンティティになりまして、しかもそこに職業が暗示されておりまして、学者、研究者である

というアイデンティティもあるでしょう。さり気なく一言言っただけで、そこに複数のアイデンティティが宿されてしまうわけです。

それほどアイデンティティというのは微妙でありまして、だからアイデンティティをとことん追いこんでいくというところ、結局はサルトルなどの実存主義者の考え方みたいになって、実存なんかになってしまいうわけです。実存までいきますと、今度はある実存と別の実存を結ぶことが出来なくなると、そのつなぎは一体何かと悩み出して、キリスト教的実存主義とかマルクス主義的実存主義とか、変なものが出てくるわけです。その点、実存までは追いこまないというのがアイデンティティ論の特徴でもあります。それは例えば人種とか民族とか組織原理とか、そういうものでアイデンティティをとらえていくというのが普通のアイデンティティ論だと思います。

東南アジアの場合に、いろいろあつちこつちをさまよいつながり、あなたは一体誰ですか、何ですかと質問した場合に、最も多い答えは何かというところ、宗教で答えるというケースです。私は仏教徒です。私はイスラムですと、

ですから、誰かがその状況の論理に即して選択していることが多いのです。歴史的状況、あるいは目の前に誰がいるとか、あるいは今何が問われているとかいうことによつてアイデンティティは変わる。やはりアイデンティティというのは一種の複数の要素の貯水庫である、という見方もできるかもしれない。

東南アジアの場合に、そうたくさんにはバラつかずに、基本的には宗教、それから人種民族、また順番が逆になつて人種民族が表に出る場合もありますし、一概には言えませんが、かなりユニークなアイデンティティをめぐむ状況があるというところは言えると思います。特に日本などと比べて、非常に違うのは、私はタイ国民ですとかビルマ国民ですとか、そういういわば人工的な機構に属していることをアイデンティティのよすがと考えることが少ないということが言えます。「私は会社員です」とかいふことは、そう簡単には言わない。だから私は仏教徒だというふうな答えが一番妥当であつて、素直だということになるでしょう。

その点、大事なことは、日本などと違って組織原理と

宗教で自分を自己紹介するケースが非常に多いというのは面白いと思うのです。

とにかく、それほどアイデンティティというのはセレクトタイプで、オプションであります。つまり、選択的だということですね。近代化すればするほどアイデンティティというのは、選択的になり、そしてバラつきが増えてまいります。

アメリカの社会学会で、アイデンティティが議論をされている時に、冗談で、そのアイデンティティの最高の専門家が、別の人に、「あなたのアイデンティティは一体何ですか」と聞いたところ、「私のアイデンティティは、アイデンティティ論に反対することです」と答えたという有名なケースがあるので。

そういう意味で、アイデンティティということは、人が言うほど単純な問題ではない。昔はアイデンティティというのは固定的に決まっていた、それは説明すればすぐに分かるものだったと言われていましたが、とんでもない。アイデンティティというのは意外に分らないものなのです。

というのが弱いということです。組織原理というのは、複数の人間の間に働く秩序化の法則のことです。複数の人間ですから、目の前に一人の人間が立って、二人間の関係になっただけで、途端に組織原理は働き始めます。目の前に立場が上の人が立ったら、途端にこちらは恐縮して、お礼の角度も深まりますし、態度が変わるわけですね。そこには明らかに上下の序列ができて、権威主義的な秩序が途端に出来る。そこにはすでに組織原理が働いているわけです。

東洋というのは中国文化圏ですが、そういう社会秩序を上下に見るという特徴がありますから、組織原理というものが非常に面白い特徴をみせるわけです。基本的にはかたい。かたいということは内と外との区別がはっきりしている。こいつはよそ者だと思ったら、どんな偉い人でも相手にしない。要するに中における上下の序列が問われている。

かたいと同時に、秩序は上下の序列で考えられる。そしてなるべく組織をしぼる、あるいは組織の柱みたいな考え方を、一本化しようとしている。複数の原理で組織

を支えるなんてことはしない。例えば「うちに御先祖様が三種類ありまして」なんていうことは日本人は言わないわけではありまして、御先祖様は一種類に決まっているわけです。つまりその意味で非常にモノリニアルな線を作ることによって、組織を固めようとしている。

いい例が日本でありまして、日本の社会というのは不思議なことに、父方単系制という非常に珍しい社会です。私の矢野は父方の矢野であり、父も矢野であり、祖父も矢野であり、ずっと父方の系譜をたどることで矢野というのはいくつもの出来ているわけです。これは非常に珍しくて、アジアではあとはバタ族ぐらいでしょうか。日本人は特別にずば抜けてアジアでは偉いと思っていますが、いろんなところで少数の部族の特徴を宿しています。母方の名字をたどるのが有名なスマトラのミナンカバウ族です。これも少数です。

しかしどちらであれ、単系制の場合には組織原理が非常にタイトになりまして、家意識とか一族意識、同族意識というのが固くなります。矢野家とか矢野一族とかいうようになる。そして親類縁者をキチンと調べあげて、

そういう組織を非常に固く守ろうとします。中国や韓国になりますと、これが同族社会になりまして、全く違う原理が働いていますが、今日はこれに立ち入りません。

東南アジアではそういう一部の例外を除きますと双系制社会です。双系制というのは、父方と母方が対等の比重をもつということですから、系譜上対等の比重をもつとどういふことになるかというと、名字ができなくなってしまう。東南アジアには名字の存在しない社会が多い。名字がないと、みんなが自分の名前しか持たなくなる。そうしますと変なことがはやりまします。私が住んだ村なんかだとニックネームがはやっていました。例えばタレブという名前の人が十何人いますと、名字がないので区別が付きません。そこで、米ひき小屋のタレブとか、メッカに行つて帰つてきたタレブとか、そういう形でアイデンティファイしないと個体識別ができなくなってしまう。つまり、ニックネームが非常にはやる。双系制社会というのはその意味で非常に厄介です。

逆にいうと、人間がみんな個の単位で存在する方向にしむけられてしまっています。バラバラの、要するにいわゆ

る個人主義ではないのだが、何か個の原理で社会が動く。

つまり逆に言うと集団の原理が弱まるというのが東南アジアの特徴であります。ですから、そういうゆるやかな組織原理では、アイデンティティというものが家の原理とか組織の原理と結びつかずに、せいぜい宗教の原理とか、民族人種の原理とか、そういうものとしが結びつかなくなってくるということなんです。

それからもう一つ、日本などと比べて違うのは、国家という観念が非常に弱い。国家という観念は昔から東南アジアにあったんですが、東南アジアの国家というのは、私のいくつかの作品にはつきり書いてありますように、川ぶちに一点として存在する国家なのであります。つまり拡がりを持たない国家、むずかしく言うと領域性を持たない国家です。私は、それを「小型家産制国家」という。

国家が点でありますから、一見すると町に見えますが、町が国家あるいは村が国家、そんな国家すら存在するわけです。東南アジアの国家というのは、不思議な国家でありまして、私の学問の特徴の一つは、そういう新しい

種類の国家観を探し出してきたということです。

国家というと、ヨーロッパみたいのに、国境があつて、領土があつて、その中に国民が住んでというような国家観念がふつうです。しかし、そのような国家観は、ヨーロッパが持ちこむまで東南アジアには存在しなかった。ですから国家が人々のアイデンティティを、例えばお前は日本国民だ、おまえはドイツ国民だという形で作るということも無いわけです。タイ国民であるということの意味をみんなあまり認めていない。それ以上に仏教徒であるとか、回教徒であるとか、宗教のほうが先にくることになるわけです。

そういう意味で東南アジアのアイデンティティというのは、私ども日本人のアイデンティティとはかなり違います。そこが非常にむずかしいところでもあります。先程言いました双系制原理というのは、私達から見ると全く分らない原理で、日本人には了解不可能です。

名字がないことではないでしょうと日本人は言うんですが、東南アジアは、ほぼ全無な位と思つてください。タイの人は名字をつけていますが、これは一九一六年かに

ラーマ六世というバタ臭い国王が、ヨーロッパには名字がある、名字がないのは後進国の証拠だということで、おふれで強制的に国民に名字をつけさせたということからはじまっているだけありまして、社会学的に言うとな名は成立しない。

タイも双系制社会である。だからここでは名前を呼ばなければいけない。山田太郎という人がいたら太郎と呼ばなければいけない。私達のすぐ身近なあの東南アジアが、それほど日本から遠く隔たっているということを、私達はもう少し知っておく必要があるわけなんです。

だからアイデンティティというと、私達はすぐに国家とか家、家族とかということをやっている、日頃から加藤さん、佐藤さん、田中さんという形で相手のイエのアイデンティティで私達はお互いを呼びあっているわけです。そういうアイデンティティは東南アジアには存在しない。あくまでも個人のアイデンティティです。

個のアイデンティティだけで人間は生きていけるかという、それは生きていけないし、それではさっき言った全人類、あるいは他とのつながりという非常に大事な

モメントが消えますから、やっぱりどうしてもお前は誰だと言った時に、私は何とかですと名前を言うよりは、私は仏教徒ですとか、私は回教徒ですという、つながりのあるアイデンティティで答える方を選ぶわけです。

そういうことで宗教、組織原理、国家などと言いましたが、宗教というのがそういうバラつきやすい東南アジアをうまくまとめている、これがかなり集団主義的な要素を東南アジアに与え、そしてバラバラになりがちな人間というものを、普遍とか宇宙とかと結びつけていく大きな役割を果たしている。東南アジアにとって、なぜ宗教がそれほど大事かというと、そういう双系制的社会組織原理という基盤が大きな意味をもっているように思います。

私は大胆な仮説をもっていました、あるところでは宗教心が強いし、ある所では宗教心が弱いということをよく発言いたしますが、宗教心が強い弱いというのは、やはりアイデンティティの問題でありまして、自分をどう見るか、自分をどう表現するか、その表現する時にエゴイスティックな表現と、広く遍くつながっていく表現形

態と二通りあるわけです。

それのどっちを選ぶかという時に、今の東南アジアの例が示しますように、双系制的状況では下手しますと自分のアイデンティティが弱くなる。人間同士のつながりがなくなる。したがって宗教でいいこうという形でアイデンティティの条件として宗教を選ぶ。そういうことで非常に宗教心が強くなっていくように思います。

日本人が宗教心が弱いというのは、宗教以外に他とながりのう梓とか、いろんなものがたくさんあったということなんでしょうね。日本人は自分をこえるものを作りましたのかもしれない。家とか国家とか組織とか、たくさん作り過ぎてしまった。その結果、宗教はもともとあったのだが、だんだんと日本人のアイデンティティを説明する原理としては弱体化した。日本人は基本的には宗教心が強い国民だと思います。ただ要するにアイデンティティなり、自己表現なりの手段として、そこに宗教がなかなか使われにくいというふうに解釈したらどうか、そう私は思っているわけでありまして。

脱線しましたが、東南アジアでは国家がアイデンティ

ティを与えることはまずありません。政府からインドネシア人だといわれたとしても、インドネシアという国が、正式に独立したのは一九四九年で、それ以前にはなかったわけです。人間というのは、そのようなものにアイデンティティを託せるはずはないと思います。やはり私はジャワ人ですとか、イスラムですとかいう言い方をした方が正しいわけです。

そろそろ話をしめくくってまいりたいと思います。今の東南アジアの最大の悩みというのは、やっぱりアイデンティティの問題だろうと思います。自分が一体何なんだろうということが、まだ分かっていない。国家も信用できない。さりとて伝統的なアイデンティティの基盤というのは崩れつつある。

何よりも大きかったのは、近代になってヨーロッパの思想、ヨーロッパの理念、哲学、価値というのが入ってきたということでありまして。ヨーロッパというのが入ってきた結果、東南アジアはガタガタに崩されたわけです。東南アジアになかったものがたくさん入ってしまった。それをヨーロッパの人や、あるいはアメリカの人は、

近代化だとか社会の進化だと言いますが、おおむねそれは伝統的東南アジアの解体であったわけですから。

十九世紀の末から今日までを、私の研究仲間はかなりカストロフィックな状況、カストロフィーというのは大崩壊ですが、何かがタガタ崩れていった時代というふうにとらえております。これはたぶん通説に反する。通説はそれから東南アジアの近代化が始まって、今の輝かしいNICS的な東南アジアになったというふうに見ておりますが、私どもの見方は逆でありまして、むしろ十九世紀の後半から今日まではカストロフィーの時代であるというふうにとらえております。

むしろそれ以前の方に東南アジアの本来の姿があった、今の東南アジアはむしろロスト・アイデンティティ、つまりアイデンティティを失う方向に向かいつつあるというふうに見ます。まず、東南アジアなんていう言葉が出来たということ自身が、カストロフィーでありまして、これは欧米人が戦争をしたり支配したりするのに便利だから作っただけのことでありまして、現地の人が作った言葉じゃないというのがミソであります。

には他成的都市です。外の人が入ってきて作ってくれた都市が多いのです。

それが日本やヨーロッパの都市と非常に違うのでありまして、ジャカルタもそうですし、マニラもそうですし、バンコクもラングーンもサイゴンも、みんな大体、外国人が作った町です。それが首都であって、その首都はどちらかという外に目が向いていて、中に目が向かない。中に対する愛情もなければ愛着もない。中是要するに労働力のプールであり、兵隊の調達源であるという感じで見ている。そういう非常に本質的に冷たい首都をもっているのが東南アジアであります。ここにおいても農民は惑うわけですね。農村こそが東南アジアだったのに、いつの間にかバンコクとかジャカルタとかいう派手なところが東南アジアの顔になってしまった。

いろんな形で例をあげていきますと十九世紀の後半から今日にかけて、本来の東南アジア像が崩されていっていることが証明できるわけです。それが人々に心理的不安感を与え、基本的にアイデンティティをめぐる状況を崩し、しかも今の動きを正統化するイデオロギーが外か

ただこれは便利だと言いましたが、たしかに便利ではあります。ある地域を区切るというのは人類の一つの知恵かも知れない。その意味においては、東南アジアというのは悪い言葉ではないのかもしれませんが、東南アジアというものが基本にあるのではなくて、バラバラのユニット、つまり本来的な単位があるのです。それが今の形で統合されていきながら、学説的にもそれを何とかまとめようという努力がなされて、少しずつ大風呂敷みたいな東南アジアに近づいていっているだけでありまして、だからこそ小さな単位の民族や部族に属している人から見ますと、自分は一体、どうふるまえばいいのか、自分はどうか考えた方がいいのか、一番悩みが深まっている時代だと私は思います。

都市化が進みました。デルタという人間が昔から住まなかった所に巨大な都市ができて、今やそれが首都であり、外とのリンクの窓口であり、いわば真つ暗な田んぼの中の誘蛾灯みたいな効果をもっています。いろんな人を吸いつけてしまう。しかし、あれは東南アジアの本来の姿ではないのです。東南アジアの都市は基本的

ら、どんどん近代化論とかいろんな形で入っている。

その意味で外文明と内世界という、そもそもの私のテーゼに戻るわけですが、東南アジアはたえず外から何かが入ってきて作られますから、今は今で、ある波がかぶさってきているのかもしれないというふうにも考えられる。その大きな波の一つが日本であるということは皆さんも察しいただけると思う。日本という波がかぶさりはじめた。これは、新しい外文明であります。

日本の文明はユニークな文明でありまして、まず自動車、味の素、家電製品などを売りつける。要するに家の中にスポッとおさまるものを全部売りつけていくわけです。たしかに、日本の商品は便利であります。生活様式文明といえましょう。ただ、この生活様式文明というのは困る面もありまして、大体固有文化というのは生活様式を軸に成立いたします。何を食べる、何を食べないというのは固有文化で、中にルールとしてあるんだけれども、それを平気で崩していく。

とにかく、東南アジアは、そうして絶えず外からいろんなものをうけながら揺さぶられてきて、いつまでたっ

ても、これこそが東南アジアというものを作りきれない世界なのです。玉ねぎみたいなところがありまして、はいでもはいでも東南アジアというのは出てこないのであります。

一番上に日本というものがかぶさっている。それをはいだら下にアメリカというものが見えて、アメリカをはいだら、今度はヨーロッパが見えて、ヨーロッパをはいだら今度はアラブが見えて、アラブをはいだら今度はインドが見えた。インドをはいだら何にもなかったというように、東南アジアというのはいなくなってしまう。そういう波がかぶさっていつにいつに、アイデンティティというものが一番問題になってくるわけです。話の初めに言いましたように、東南アジアというものはないのです。ですから東南アジアそれ自体のアイデンティティは語れないわけです。語れないけれども、アイデンティティを持たない地域とか、アイデンティティを持たない世界があるなんていうのは、これほど悲しいことはないわけでありまして、そろそろ世界の知性が、よってたかって東南アジアのアイデンティティを考えようじゃない

か、東南アジアとは何かということを考えようじゃないか、という気運が出てきているとするならば、大変すばらしいことです。したがって日本の役割というのは、訳のわからないアイデンティティの状況に、さらに混乱を加えることではなくて、東南アジアの人々に何が東南アジアか、あるいは東南アジアの尊厳とは一体何か、過去の東南アジアはどう作られてきたか、そこにはどういう問題点があったか、ということを静かに考えさせるきっかけを与えることでなければいけません。

## 5

私が言いたいことは、東南アジアの人々に東南アジアというコンセプトを与えることはむずかしいということなのです。いろんな意味でむずかしい。まず現実的に非常に無理があるということもありますが、どういう与え方をしたら、正當な東南アジア像ができるかあるいは東南アジア観ができるか、これがむずかしいですね。

今の主権国家を認めて、それをくくる、例えばASEANみたいな感じで東南アジアという概念を使うか、東

南アジアの中には九カ国か十カ国入っていますという形で数えていって、それをくくるのが東南アジアという形でいくのがいいのか。私個人としては、いずれも否定しているのです。何かもう少し違った東南アジアのアイデンティティがあるのじゃないかと思っています。それは、今日はヒントしか申し上げられない。それは、これまで東南アジアに覆いかぶさってきた様々な外文明、インド、アラブ、中国、ヨーロッパ、アメリカ、そして我が日本、これをじつと見つめる目こそが、東南アジアを支え、救うんじゃないかなという気がしています。

つまり自分達を生んだもの、作ってきたものを、今度は客体化して、つき放してみよう、だからかりに東南アジアにおいてインド研究、あるいはヒンズー研究が芽ばえる、イスラム研究、アラブ研究が芽ばえてくる、中国研究が芽ばえてくる、あるいはアメリカ研究やヨーロッパ研究が出てくる。日本研究も出てくる。しかし、それは決してためにする学問ではなくて、歴史の過去をじつと考え、自分達を生んだモノを冷たくクールにみつめていく目、これを生む手続きでなければいけない。

外交の議論ではないんです。政治の議論でもないんです。これはあくまでも文明論の議論であります。東南アジアの人々の尊厳の問題でもある。東南アジアの一人一人の人間のなかにヒンドゥーイズムが宿っておりますし、イスラムが宿っております。そして欧米的なカルチャーも宿っているでしょう。最近では日本の流行歌を歌うようにもなりました。

いろんなものが自分のアイデンティティのエレメントとして宿っている。それをじつと見据える目をもった時に、初めて東南アジアは自分の足で歩き出せるし、自分が何かを語ることができるだろうと思う。私が申し上げられるヒントはそれだけなのです。その時に、初めて東南アジアという世界が成立するだろうということです。その意味で、そう軽々しく東南アジアなんて語ったらいけないのです。私が申し上げたいことは以上です。御静聴ありがとうございます。

（本稿は一九八八年一月二十三日に行われた本研究所創立二十五周年記念講演会における講演内容を収録したものである）  
（やのとのおる・京都大学教授）